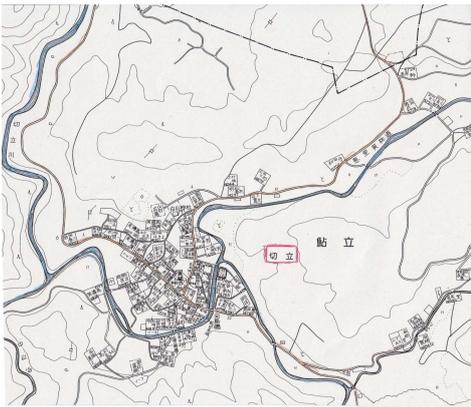


高鷲町内集落地誌 (3)

「高鷲村史続編」より編集して再掲載した。

切立



切立という地名は、「鮎走由緒書」には霧立の里といったのを後世の人が切立と改めたとか、また真観寺文書にも霧立と書いてあるが、霧から切になぜ改名したのか定かでない。切立は山に囲まれた入洞集落であったが

既成の農地に頼る生活、であったので年々人口が増え、新田の開発



切立地区旧道・旧蹟地図

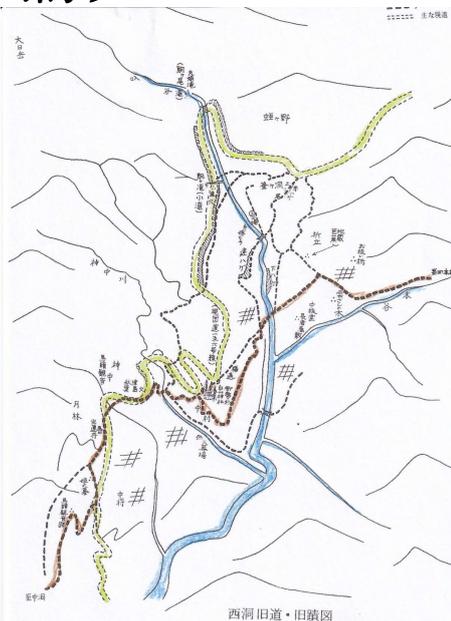
平成4年当時の切立地区
が急がれた。水利の良い本村や明谷・恵里美はすぐに開発されたが、西替谷・桑ヶ洞・中山沿いの原野も着目され新田として開かれた。しかし高冷地のため耕地面積の割合に比べ米の収量がきわめて低かった。

その他、農業に伴う収益は、養蚕と木紙の生産、製炭ぐらいで、生産額も少なく、集落の貧困な暮らしをしいられた。そこで農閑期になると男達は出稼ぎを余儀なくされた。

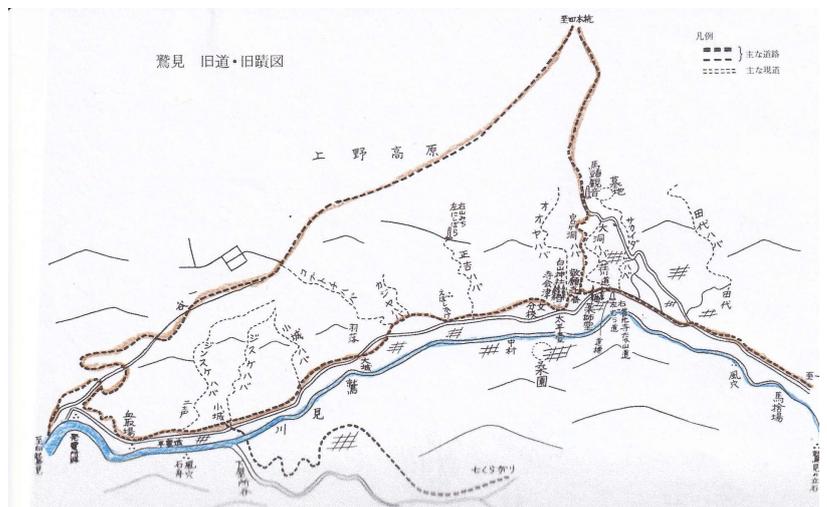


現在の切立・真観寺前(令和7・6・13 撮影)

鷲見



平成4年当時の鷲見地区



鷲見地区旧道・旧蹟地図

鷲見という地名は鷲見大鑑の武蔵権守が鷲の巣を見つけられ、大宮氏を鷲見氏と改められてから名付けられたと記してあるが、それ以前に鷲見という地名はあったと思われるが、定かでない。

鷲見の集落は平家の落人説を伝えられている資料はないが、平安時代の末期から濃飛をつなぐ中継地点として落人伝説があってもおかしくはない。

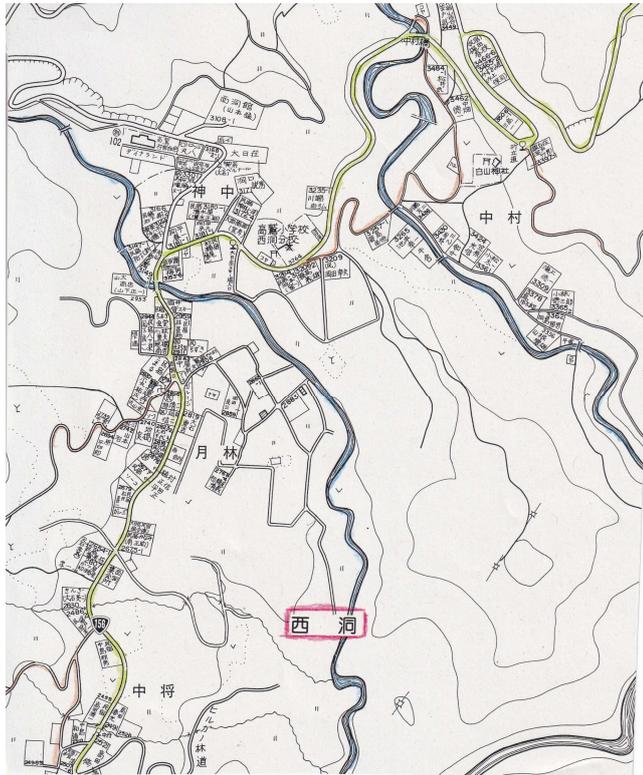
鷲見の農業は、焼畑農業を中心に稗・粟・きび・そば・大小豆の生産が盛んであった。また、鷲見の集落は国道筋より離れている遠隔地であったため、昭和5年高鷲電気利用組合を設立させ、明方発電所より中古発電機を譲り受け、自家発電により点灯、以来昭和37年まで高鷲発電所として区域内一円の送電を続けた。



現在の鷲見白山神社前(令和7・6・13撮影)

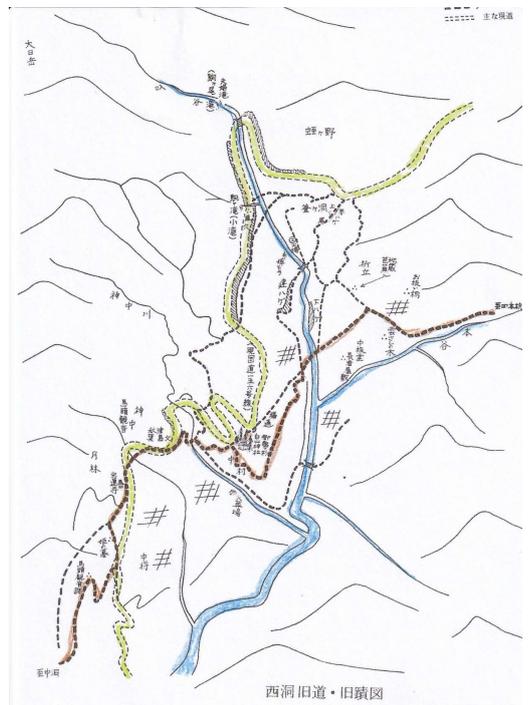
西洞

西洞は西洞・中村・折立の三郷をまとめて西洞郷と言っており、広大な蛭ヶ野も郷内の一部とされていた。また、昔から濃飛の主要な交通路白川街道が上野を横断し、四本杭という濃飛の国境線を定めた碑がある。この街道を上野から下がって西洞に至る道も開けていた。このように街道から眺望できる西の方の洞という所から名付けられたと考えられる。



平成4年当時の西洞地区

旧道は、節谷を越えて松の木の中を通り、馬頭観音付近から中將に出て、月林から中村に降り、白山神社の裏手の横通りから折立を経て白川街道四本杭につながっていた。集落は山峡の段丘地や川沿いの低地月林・中村と、地震陥没地の折立の三郷によって形成されており、静かな山間の村落である。特に折立地区は山間の隔離された盆地にあり、住民は北の蛭ヶ野高原や他村へ移り、現在では誰も住む人がいな。牧歌的雰囲気のある廃村となっている。



西洞地区旧道・旧蹟地図



現在のダイト上り口付近(令和7・6・13撮影)

現在では誰も住む人がいな。牧歌的雰囲気のある廃村となっている。